

意思決定支援の事例 ③

「意思決定」には、「意思の形成」→「意思の表明」→「意思の実行」の3つの段階があるといわれています。私たちは、日々幾多の「意思決定」を繰り返しながら生活していますが、年齢を重ねてきたときに、例え明確な認知症という症状はなくても、特定の「意思決定」をひとりで完結することが難しくなってくるものが起こりやすくなってきます。



佐々木真由美さん（82歳）の例を見てみましょう。真由美さんには子供はなく、5年前に夫に先立たれた今も、週3回のテニスを欠かさないほど元気にくらしていました。しかしある日、テニスが終わって仲間と談笑しているときに、急に呂律が回らなくなり、同時に手に痺れを感じました。元看護師のテニス仲間が脳梗塞の症状だと察知して救急車を呼び、命に別状はない状況でしたが、真由美さんは右半身に麻痺が残ってしまいました。

脳梗塞の後遺症として、判断能力には引き続き問題ないのは幸いでしたが、右半身の麻痺を抱えた状態では、亡き夫から相続した東京下町の建坪の狭い3階建の自宅で、これまでのように暮らしていくことは、いくら在宅介護を使ったとしても困難なのではないかと不安を抱き始めました。

しかし真由美さんは、ずっと専業主婦として家事は完璧にこなしてきた一方で、お金まわりなどの難しいことはすべて夫を頼りにしていたので、どうしたら良いのか分かりません。動かせる左半身だけを使って本を読んでも、慣れないインターネットで調べようと思っても、自宅の売却のこと、税金のこと、老人ホームのことなど、何が正解なのか理解ができずに、不安ばかりが募ってしまいます。

そんな時、介護保険に関わる人たちは「老人ホームなんかに入居せずに、介護保険や自費のサービスを使えば、在宅でも十分大丈夫」といい、新聞広告に出ていた老人ホーム紹介会社に電話をしたら「すぐに自宅を売却して、老人ホームに入居すべき」と言います。その老人ホーム紹介会社は、不動産業者が母体なので、自宅の売却もすぐにできますよ、お手伝いもしますよと親切に言ってくれました。

しかし真由美さんは、一緒に考えてくれる人が、その人自身のビジネスの損得に関わっていると感じ、真由美さん自身の立場に寄り添って、真由美さんの意思決定の支援をしてもらいたいと考え、OAG ライフサポートとご契約を締結することとなりました。

OAG ライフサポートでは、ご本人の尊厳の保持と希望の実現のお手伝いをします。それがOAG ライフサポートの本業なのです。

高齢期になると、人生に重要な影響を及ぼす大事な意思決定を求められる機会が、次々と訪れます。そんな時に、自分自身ですべての意思決定を完結することは不可能だということに自覚し、自分自身に寄り添った意思決定の支援をしてくれるのは誰なのか、それが家族ではないとしたら、それに代わる仕組みを準備しておくことが大切です。 つづく